近代皇室における「乳人」の選定過程と変容

森　暢平

【要約】デモクラシーの時代に登場した皇室の新カップル、裕仁と良子は〈近代家族〉を志向していた。しかし、〈近代家族〉の理念とは逆行する乳人制度を存続させざるを得なかった。そのために、皇室と国民を結ぶ回路にするという乳人の新しい理念を導入し、東京近郊の府県を対象に、職業と身分を問わずに女性を求めた。「平準化」された国民を前提にして、健康な母なら誰もが候補となれることをうたっていた。ところが、選定過程では、地域における政争や成功者への嫉妬感情から、選ばれた乳人を非難する動きが連続し、そのたびに選考は厳格化していった。乳人はしだいに軍人を中心とした公務員の妻、広くみると新中間層の主婦および地方の名望家層に収斂していく。乳人制度は、皇族に授乳できる女性の確保という当初の目的を離れていく。とくに戦争が本格化してくると、家庭を犠牲にして国家に奉仕する「母」を顕彰し、「母」を通じた国民統合を図るという別の目的の制度に変質していく。

史林　一〇二巻二号　二〇一九年三月

はじめに

大正デモクラシーの時代に登場した皇室の新しいカップル皇太子裕仁とその妃良子（のちの昭和天皇・香淳皇后）は、家族の近代化を志向していた。女官を通勤制にすることで自分たちのプライバシーを確保する、子供たちを手元で育てる――などの改革から二人の〈近代家族〉志向が分かる。いっぽう、子供への授乳を他人に任せる「乳人」は、家族の近代化とは反対の位置にある。しかし、裕仁・良子の代において、乳人は存置され、選考規模は拡大していく。家族の近代化

を志向する裕仁・良子のもとで乳人はなぜ存置されたのか。そればかりでなく、なぜ規模において拡大していくのか。そもそも乳人はどのように選ばれ、どのような運用がなされていたのであろうか。

この点を考えるときに念頭におくべきは、乳人制度が皇室と国民を結ぶ回路として期待されたことであろう。乳人は、民衆のなかから選ばれた。彼女たちは、いわば、人びとの代表として皇族に授乳したのである。宮内大臣、牧野伸顕は一九二一（大正一〇）年、地方長官を前にした会合で、行幸啓や救恤などが「地方民の皇室に接近し奉る機会」であると述べており、民衆とのつながりを重視していた[①]。乳人制度は、皇室民衆化路線のなかで、人びとと皇室をつなぐ装置であったのである。乳人の研究は、特殊な制度の個別的な事情を明らかにするものではない。皇室と民衆の関係の変容を明らかにするための研究なのである。

大正期から昭和戦前期にかけての皇室と民衆の関係をめぐる研究には、行幸啓を分析した原武史の『可視化された帝国』、裕仁の訪欧を扱った波多野勝の『裕仁皇太子ヨーロッパ外遊記』、国家あげての天皇制イベントを論考したケネス・ルオフの『紀元二千六百年』などがある[②]。いずれも大掛かりな大衆動員を伴うイベントを扱う。それに比較すると乳人という制度は目立ちにくい。だが、皇孫・皇子が生まれるたびに採用されるという継続性があるため変容を明らかにしやすく、地域社会のあり方とも密接に関連している。ところが、乳人という存在に研究の焦点が当たることは多くなかった。まとまった研究としては、小田部雄次の『ミカドと女官』が唯一あるが、「河井弥八日記」の関連部分から分かることを分析するのみで、乳人の選定過程とその変容の全体像を示すまでにいたっていない[③]。

本論文は、地域社会に焦点を当てるため、府県レベルの文書の分析を中心とする。乳人は東京と近県から選ばれることが多かった。このなかで東京・神奈川・埼玉・栃木の公文書館が乳人の選定過程を示す文書を所蔵する。とくに東京都公文書館は量が多い[④]。そこで東京府文書を主にし、その他の県文書、宮内庁宮内公文書館文書、国立公文書館文書と比較しながら、これまで必ずしも明確ではなかった裕仁・良子のもとでの乳人選定過程と変容を明らかにしていきたい。

はじめに、良子の七回の分娩と生まれた親王・内親王の名前をあげておく。一九二五（大正一四）年一二月＝成子（照宮）▽二七（昭和二）年九月＝祐子（久宮、夭逝）▽二九年九月＝和子（孝宮）▽三一年三月＝厚子（順宮）▽三三年一二月＝明仁（継宮、皇太子）▽三五年一一月＝正仁（義宮）▽三九年三月＝貴子（清宮）。それぞれの乳人選考を便宜的に、一九二五年選考、二七年選考……と呼ぶことにする。

なお、史料には「癩病」「精神病」「狂人」など差別意識を含む言葉が使われている。本論文は、差別意識のなかで乳人が選考された歴史的事実を重視するため、原文で使われる用語をそのまま用いた。しかし、差別を助長する意図はないことは強調しておきたい。

① 「宮内大臣演説」（一九二一年五月九日）国立国会図書館憲政資料室牧野伸顕関係文書書類の部（資料番号31）。

② 原武史『可視化された帝国』、みすず書房、二〇〇一年。波多野勝『裕仁皇太子ヨーロッパ外遊記』、草思社、一九九八年。ケネス・ルオフ『紀元二千六百年』、朝日新聞出版、二〇一〇年。

③ 小田部雄次『ミカドと女官』、恒文社21、二〇〇一年、一七九―八七頁。ほかに、「河井弥八日記」の解題として高橋紘が若干触れている。高橋紘「幻の御用邸と皇子教育」（河井弥八『昭和初期の天皇と宮中』四巻、岩波書店、一九九四年、二四五―六頁）。

④ 各公文書館における史料残存状況は以下のとおりである。

表1　乳人文書の所蔵状況

	1925年	1927年	1929年	1931年	1933年	1935年	1939年
東京都公文書館	○	○	○	○	○	○	
神奈川県立公文書館						○	
埼玉県立文書館		○	○	○			
栃木県立文書館	−	○	○			○	
宮内公文書館	○						
国立公文書館				○	○		

このほか、皇室の「御手許文書」として、一九二七年の「久宮御誕生録」、二九年の「孝宮御誕生録」、三一年の「順宮御誕生録」、三三年の「東宮御誕生録」、三五年の「義宮正仁親王殿下御誕生録」があるが、公開されていない。

第一章　乳人という制度

乳人とはいかなる制度であり、どのように運用されていたのであろうか。この章では、比較のため、明治から大正初期にかけての乳人を若干検討し、そのうえで、裕仁・良子の時代の乳人制度の概要をみていく。

第一節　明治天皇・大正天皇の乳人

皇室を含む近世京都の公家社会において、乳人（乳母）に授乳させることは一般的な慣行であった。東京に移ってきた天皇睦仁（明治天皇）にとって、最初に乳人が必要となったのは、一八七三（明治六）年、典侍・葉室光子の出産である。このとき、大区小区制のもとの東京府第三大区に対して、二二、三歳から三〇歳までの出産した女性を推薦するように依頼があった。[1] 七九年に生まれた嘉仁のばあい、短期しか奉仕しなかった女性を含め、一六人の乳人がいた。[2] 士族の妻八人、平民の妻五人、不明三人である。府内の官衙を通じるだけでなく、縁故で探すこともあったようである。

次代の嘉仁・節子（のちの大正天皇・貞明皇后）の第一子、裕仁（迪宮、一九〇一年誕生）の乳人、小林シゲ（二三歳、[3] 浅草区）のばあい、担当する産婆や、宮中顧問官で軍医総監である橋本綱常から声を掛けられ採用された。[4] 裕仁は海軍中将、川村純義の家に里子に出され、生まれた年の冬は神奈川県中郡大磯町の鍋島直大別邸で過ごすが、その際、中郡長に乳人選びが依頼された。[5] 現地調達である。翌年六月に生まれた第二子、雍仁（淳宮）のとき、東宮職は、小石川・本郷・赤坂の各区長に乳人を選考するように依頼した。[6] しかし、採用されたのは、三区の候補でなく、妹が皇后宮職雑仕で、皇室と縁故があった中村タイ（二六歳、浅草区）ほかであった。[7] 一九〇五年誕生の第三子、宣仁（光宮）のとき、東宮職は、東京府下の豊多摩・荏原・北豊島の三郡の郡役所に選考を依頼し、豊多摩郡野方村の伊藤うた（二七歳）ほかが選ばれた。[8]

節子は一九一五（大正四）年一二月、第四子、崇仁（澄宮）を生む。その「御機嫌奉伺」のため、宣仁の乳人だった伊藤

が葉山御用邸を訪問したことがあった。その際、伊藤自身も子供を生んだばかりであったため、崇仁への乳人奉仕も依頼され、採用された[9]。崇仁のときも、前述三郡に乳人選考が依頼されたが、乳人の乳量が少なくなり、後任選びに苦労しているとき、都合よく伊藤が現れたというわけである[10]。

大正初期までの乳人選びは郡役所を通しながらも、縁故にも頼って女性を探した。あくまで、健康な女性に授乳を依頼することが目的だった。乳人の調達方法を一定しないほうが、臨機応変に対応できるというメリットがあったのだろう。

ところで、天皇睦仁の時代は、乳人がニュースとなることはなかった。しかし、嘉仁の代になると、様子が少し変化してくる。たとえば、前述の伊藤うたは、勤倹を重んじる家庭で育ったことや、厳しく子供を教育することが新聞に紹介された[11]。家族としての皇室に注目が集まるとともに、乳人がどのような女性なのかに関心が集まってきたのであろう。

第二節　乳人の存続と奉仕の要件

都市における俸給生活者層の増加で、そのパートナーとしての主婦が拡大・定着するのは大正期からである[12]。一般社会、とくに上流社会においては、乳母の慣行はなお存続していたが、批判もあった。石橋順子は、棚橋絢子・下田歌子・鳩山春子ら大正期の女子教育の唱道者たちが、社会の乳母慣行を批判していたと指摘する。貧しい女性が身体を資本にして母乳を提供すること、両親が愛情をもって子供を育てる〈家庭〉の概念から外れることなどが理由である[13]。こうした風潮のもと、〈近代家族〉を志向する裕仁・良子が乳人制度を廃止してもおかしくはなかった。

しかし、結果として乳人は存続する。宮内省の記録は「御誕生アルヘキ皇孫ノ御乳ハ主トシテ妃殿下ノ御母乳ニ依ラル、コトハ改テ御決定相成リ居レルモ、万全ノ方法トシテ予備的ニ御乳人ヲ選定シ置ク必要アリ」と記す[14]。良子の母乳を主とすることは事前に決定されていた。だが、「万全ノ方法」として「予備的」に乳人をおく必要があるとされた。「万全」という名目の前には、裕仁も乳人廃止を強く主張できなかったと考えられる。「旧慣墨守」を信条とする母・節子が

表２　乳人選考の対象とした府県

選考年	対象府県数と内訳	
1925年	4	東京・神奈川・埼玉・千葉
1927年	8	関東８府県（1925年の４府県＋茨城・栃木・群馬・山梨）
1929年	8	関東８府県
1931年	8	関東８府県
1933年（第１回）	8	関東８府県
1933年（第２回）	7	岐阜・静岡・愛知・滋賀・京都（のちに東京・茨城追加）
1935年	13	関東８府県＋福島・新潟・長野・静岡・愛知
1939年	25	1935年の13府県＋青森・岩手・宮城・秋田・山形・富山・石川・福井・岐阜・三重・滋賀・京都

存在するなかで、古い価値観から一気に自由になることは難しかった。

しかし、〈近代家族〉のあり方から逸脱する乳人を存続するには、そこに新たな意味を込める必要がある。そこで出されたのが「〔家族の〕身分、職業ノ如何ヲ問ハサルモ一族ハ健康ニシテ家庭正シキコト」という要件である。[15] 後段に、「一族ハ健康」「家庭正シキ」という限定が付いたが、基本的には、身分・職業不問の原則が掲げられたのだ。新聞はすすんで「貴賤貧富の論なく広い範囲にわたつて選ぶ」と書いた。[16]

さらに重要なことは、東京府内の狭い地域や縁故に頼るのではなく、東京と近郊県を対象に広く依頼し（広域化）、選考自体を公表するなど公示性を高めたことである（公示化）。国民との新しいチャンネルとして、府県を通じた乳人選びが利用された。一九二五年選考で宮内省は家族の「身分・職業不問」要件のほか、乳人本人についてつぎのような要件を設けた。

（イ）身体、精神共ニ健全ニシテ血統正シキコト
（ロ）年齢ハ二十二、三才ヨリ三十四、五マテナルコト
（ハ）初産ナルト経産ナルトヲ問ハサルコト
（ニ）大正十四年九月十五日ヨリ十月末日マテノ間ニ於テ分娩シ、又ハ分娩スヘキ者ナルコト
（ホ）本人ハ乳児ヲ帯同シテ一ヶ年間、御所附属邸内ニ居住スルコトヽシ、任意ノ外

出ハ許サレサルコトヲ承知ノ上ナルコト。御乳ヲ差上クルハ夜間ヲ通例トス。夜間ハ御所ニ伺候セシムヘキニ付乳児ハ夜間牛乳ニテ哺育ノコトヽシ之ニ世話婦ヲ附ス、世話婦ニ要スル費用ハ官給トス。昼間ハ乳児ニ哺乳スルコトヲ得ルヲ通例トス

（ヘ）給与　月給五拾円、住居食事ハ官給トス。尚、最初、支度料ヲ支給ス[17]

（ロ）については、一九二七年選考以降は対象が広がり、二〇歳から三五歳となる。（ニ）についても二七年選考以降は、三カ月の幅をとった。（ホ）にあるとおり、乳人は生んだばかりの乳児を帯同してもよいとされた。これは「全く一平民の子」が、天皇家の子供と「乳兄弟」になると受けとめられた[18]。明文規定はないが、その兄姉の帯同も許された。授乳は、午前一、四時と深夜・早朝が多かった。ただ、良子の母乳が足りないときや公務があるときは昼間に奉仕することもあった。

乳人の任期は一年間で、二人が採用された。基本、隔夜奉仕である。一九二八年まで裕仁・良子は、赤坂離宮の東宮御所（現迎賓館）に住んでおり、離宮内に家財道具付きの乳人用官舎が新築された[19]。その後、即位に伴い夫妻は宮城に移転したため、のちの乳人は旧女官官舎（いわゆる御局）に住んだ。裕仁・良子が子供を連れて静養に行くとき、乳人も那須・葉山などに同行した[20]。「任意ノ外出」は許されないとあるが、許可をとれば、赤坂離宮（あるいは宮城）からの外出は可能である。東京や近郊に家があるばあい、奉仕に差支えがなければ自宅に帰ることもできた[21]。

乳人の給与は最初の募集時には（ヘ）にあるとおり月五〇円とされた。しかし、実際の運用では月一五〇円が支給され、「世話婦」雇代と食事代も込みと変更される。乳人は親族を「世話婦」として帯同したことが多いので、「世話婦」込みの一括払いのほうが都合がよかったのであろう。宮中では女嬬の下から四番目の八級俸が月五〇円だった[22]ので、乳人は判任官の中位クラスの給与だった。実際、乳人は判任官待遇で、女嬬と同格であった。女嬬は高等女官とは異なり、天皇・皇族の前での奉仕はできない裏方であるが、「女中」を雇うことができる点で雑仕よりは格上である。また、支度料五〇

表３　裕仁・良子の代の乳人一覧

選考年	名　前	推薦府県	学　歴	夫の職業
1925年	辰巳恒子	東京	島根県浜田高女→奈良女高師	陸軍大尉
	平山シズヱ	神奈川	高等小学校	農業
	△飯島家寿	東京	高等小学校	下駄製造販売
1927年	木内喜代子	東京	福岡県小倉高女	会社員
	八田義子	山梨	長野県諏訪高女	銀行役員
	△桜井ムメ	神奈川	高等小学校	神奈川県技手
1929年	奥野智恵子	東京	兵庫県第一神戸高女	慶應大学予科講師
	竹村玉恵	神奈川	神戸市立女子技芸学校	建築会社技師
1931年	森岡節子	東京	東洋高女	陸軍大尉
	北野貞	東京	滋賀県彦根高女	陸軍中佐
1933年	野口善子	埼玉	埼玉県久喜高女→山脇高女専攻科	呉服商
	進藤はな	茨城	高等小学校→女子技芸塾	県師範学校教諭
	△竹中敏子	岐阜	大垣市立高女→報徳女学校	小学校訓導
1935年	福島治	長野	長野県大町高女→共立女専	農林省技手
	狩野のぶ	群馬	千葉県安房高女	陸軍少佐
	△前田聡子	神奈川	和歌山高女	海軍少佐
1939年	矢部経子	福島	福島高女	呉服商
	松本夫佐	新潟	新潟県巻高女→音羽洋裁学院	医師

△は補充員から「昇格」した乳人

○円のほか一年務めたあとの「退職金」は一二〇〇円が支給された（これらの金額は確認できる一九三五年までは変更されていない）。

乳人推薦を依頼した府県であるが、表２のとおりである。一九二五年選考では東京・神奈川・埼玉・千葉の四府県が対象であった。早産などに対処できるよう「地理的ニモ便利ナル地方」から選ばれた[23]。二七年には、これに茨城・栃木・群馬・山梨がくわわり、三三年選考までの四回、この関東八府県が選考対象となった。ところが、三三年の第二回選考（後述）で、初めて岐阜・静岡・愛知・滋賀・京都が対象となり、三五年選考では、新たに福島・新潟・長野が追加される。そして、最後の三九年選考では、京都・三重以東の本州すべての府県（二五府県）が対象となるのである。

選考の結果、選ばれた乳人の一覧をまず示しておく＝表３。この表には、あとから乳人

となった人物が四人いる（表中の△）。「正」の乳人に何らかの「故障」があったとき、これに代わるのが補充員である。補充員は、乳人と同時か、少し遅れておおむね二人が任命された。そして、「平素充分衛生ニ留意シ、乳人故障アル場合ニハ早速奉仕差支ナキ様心掛」けて、準備するよう指示された[24]。補充員の手当は年間一〇〇円であった[25]。

裕仁・良子の代の乳人は、皇室と民衆を結ぶ新たなルートとして利用された。その場の状況に応じて募っていた従来のやり方を改め、選考を広域化し、公示化した。自ら応募することはできなかったから公募ではない。しかし、身分・職業を問わずに、近県まで広く求める姿勢を示したのであった。全体としては、府県を通じる手続きと要件を明確にし、募集を制度化したといえる。

① 「御達留〈第三大区一、二小区〉」「総御達留〈第三大区三、四小区〉」東京都公文書館（請求番号606. D7. 02および606. D7. 03）。
② 「明宮記」二 宮内公文書館（識別番号83457）。
③ 以下、乳人の年齢表記は、着任時、あるいは発表時の満年齢。
④ 「迪宮記第一」宮内公文書館（識別番号85367）。『東京日日新聞』一九二一年九月三日。小林は夫と死別し再婚して、矢崎と改姓した。
⑤ 『東京朝日新聞』一九〇一年一一月一四日。
⑥ 「淳宮御誕生録」宮内公文書館（識別番号5545）。
⑦ 「淳宮記第一」宮内公文書館（識別番号85375）。『読売新聞』一九〇二年六月二九日。
⑧ 「光宮御誕生録」宮内公文書館（識別番号5546）。「光宮記第一」宮内公文書館（識別番号85382）。
⑨ 『東京朝日新聞』一九一六年二月二八日。「澄宮記提要」宮内公文書館（識別番号85386）。
⑩ 「澄宮記第一・第二」宮内公文書館（識別番号85385）。
⑪ 『報知新聞』一九〇五年一月七、八日。
⑫ 木村涼子『〈主婦〉の誕生』、吉川弘文館、二〇一〇年、一六―七頁。
⑬ 石橋順子「乳母の衰退――明治期以降の乳母制度」、『言語と文化』一一号、二〇一〇年、五四―六頁。
⑭ 「照宮御誕生記録」（大正一四年）宮内公文書館（識別番号30000）。
⑮ 同右。
⑯ 『東京朝日新聞』一九二五年一一月一日。
⑰ 前掲「照宮御誕生記録」。
⑱ 『報知新聞』一九二五年一一月九日。
⑲ 『東京日日新聞』一九二五年一一月一四日。
⑳ 那須御用邸には一九三一年に乳人宿舎が建設されている。河井弥八『昭和初期の天皇と宮中』五巻、岩波書店、一九九四年、六二、一三〇頁。
㉑ 乳量への配慮から、宮内省は乳人が慰安の機会をもつように心掛けていた。同右、四〇頁。
㉒ 「皇后宮職女官官制改正」国立国会図書館憲政資料室牧野伸顕関係文書書類の部（資料番号19―2）。
㉓ 前掲「照宮御誕生記録」。
㉔ 「皇后陛下御慶事乳人選定の件」冊の3（昭和二年）東京都公文書

館（請求番号307. F1. 17）。

㉕ 一九二五年選考の飯島家寿のときは補充員という制度はなく、「乳人候補者」という地位が解除されないまま待機する形であった。飯島の「乳人候補者」手当は月一五円であった。

第二章　「身分・職業不問」の形骸化

この章では、実際の乳人選びについて、一九二五（大正一四）年から二九（昭和四）年の三回の選考をみていく。この過程で「身分・職業を問わず」の理念は徐々に形骸化していく。

第一節　二五年選考（成子誕生時）

一九二四年一月に結婚した裕仁・良子の第一子（成子、照宮）が誕生したのは翌年一二月六日であった。宮内省東宮職が、東宮大夫、珍田捨巳名で、東京および近郊の四府県知事に、乳人候補者を推薦するよう求めたのは出産予定日の二カ月前の一〇月五日である。[1] これを受けた東京府は一〇月九日、市長・郡長に「希望者」探しを依頼した。あがってきた候補を書類審査して適任者を選んだうえ、府独自の身体検査を行い、宮内省への推薦者を決める手順を踏んだ。各市郡から何人の候補が出たのかは不明だが、府では七人の最終候補を選び、宮内省に推薦した。

このほか神奈川・埼玉からそれぞれ二人、千葉から一人の推薦があり、計一二人の候補が集まった。この段階で、東京帝大附属病院での健康診断があり（一一月九、一一日）、六人が合格とされた。この年の選考では、ここから宮内省皇宮警察部の調査（内舎人調査）に入る。

六人のひとり、東京府荏原郡調布村の農業の女性は、夫の父（義父）が現役村長であり、有力候補であった。[2] ところが、その義父が憲政会系であったことから、女性の名が新聞に「有力」と出たあとから、地元の政友会関係者から異論の声があがった。彼らは「足利尊氏ノ如キ逆族（ママ）ノ一族ノ者ヲ皇室ニ入ラシムルハ国民思想善道（ママ）ノ意ニ反ス」「癩病系統ノ疑アル

町村民中ヨリ乳人ヲ選定シ、若シ確定セハ由々敷問題ナリ」などと主張した。言い伝えによれば、村長家は南北朝時代に足利宿から移住し、代々名主を務めていた。反対派は、候補者が足利氏と関係があり、「癩病」の近親者がある疑いを問題とした。皇宮警察部の二日間にわたる調査では「癩病」について確定的な事実はみいだせなかった。しかし、これ以上調べるには時間がかかるため、「此際他ノ候補者中ヨリ選定可然ト思料ス」との結論がくだされた。

女孀などの採用のおり、宮内省は皇宮警察部に調査させていた。それと同じ調査であった。だが、内務省が前面に出るのちの時代と比較すると、かなり甘い調査であった。宮内省秘書課長、白根松介は当時、「本人が女のことであるから、大したことはないと思ふが、どの程度まで取調べるか中々六ヶ敷しいこと柄である」とコメントを残している。[3] 健康が重要なのであり、家柄は二の次であるという考え方である。だが、この女性の例が示すように、家柄や家族の病気は今後、トラブルの原因になり、乳人を変質させる要因になっていく。

最終的に選ばれたのは、東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町の辰巳恒子（二三歳）と、神奈川県橘樹郡稲田村の平山シズヱ（二二歳）である（一一月二四日発表）。辰巳の島根県の実家は名望家であり、辰巳自身は、浜田高等女学校（高女）を卒業したあと、奈良女子高等師範学校に進んだ教育ある女性であった。夫は陸軍大尉で、のちにロンドン駐在武官補佐官を務める辰巳栄一。[4] 女高師まで進んだ新中間層の女性が乳人に選ばれた例はそれ以前にはまったくない。新しいタイプであり、辰巳が選ばれたことは画期的だといえる。貧困層の女性がなるというイメージがあった一般社会の乳母と、皇室の乳人を差別化するものだ。いっぽうの平山は実父も義父も村会議員の職に就くなど大地主の有力農家であり、夫は村青年団幹事を務めていた。[5]

二人のうち、新聞・雑誌が注目したのは、平山のほうであった。「百姓仕事、稲敷きの穂屑に埋つてゐる生活をする人」であることに焦点が当たった。[6] 似たような候補として、新聞が「佐原の農婦」と報じた千葉県の女性がいる。[7] この女性は、東京市電気局電車課（事務職）に勤める夫をもつ主婦であり、ふだんは東京市小石川区に住んでいた。出産のため香取郡

佐原町にある夫の実家に滞在中だったが、農業に従事していたわけではない。それでも、新聞は「農婦」と書きたかったのであろう。農業は、人びととの近さを象徴する属性であった。

なお、辰巳は一九二六年四月、麻疹にかかり入院し、乳人を辞任する。このため、東京府推薦の飯島家寿（二二歳、北豊島郡上板橋村）が新たに乳人となる。下駄製造販売業の女性であった。[8] 結局、農家である平山、商家である飯島という「人びとと近い」と受けとめられる二人が乳人を務めあげることになる。飯島の夫の実家も、平山と同じく村を代表する大地主であった。しかし、そのことよりも、「履物屋」という職業は平民性を感じさせる出自として語られていく。

第二節　二七年選考（祐子誕生時）

天皇嘉仁の逝去で、即位した裕仁と皇后となった良子の二人目の子供（祐子、久宮）は一九二七（昭和二）年九月一〇日に生まれた。責任者は、珍田に代わり、皇后宮大夫となった河井弥八となる。

この年の選考では、採用要件が前回より細かく規定された。[9] まず家族（婚家と実家）について、「癩病、精神病、結核等悪疾ノ遺伝的系統ニアラサルコト」「前科者又ハ不穏ナル思想ヲ有スル者アラサルコト」とされた。親戚に「癩病」、「精神病」、結核の三つの病気の者がいない、前科者と不穏思想をもつ者（共産主義者や無政府主義者など）がいないという新たな要件が付けくわわったのである。本人については、「黴毒、痳病、癩病、結核、脚気、トラホーム、腎臓病、精神病ナキコト」と具体的な禁忌が明記された。選考方法の変更で重要なことは、府県段階で、警察の調査を入れたことである。前回の調査不足への反省であろう。

東京府の選考であるが、町村長に、候補をあげるように依頼したのは六月一四日であった。府は、町村宛ての文書のなかで「身分職業ノ如何ヲ問ハスト雖、宮中奉仕ニ付キ貴職ニ於テ相当ト認ムル者」「身分及職業ノ賤シカラサル者」という宮内省要件にはない厳しい条件を付けくわえている。この年は東京一五区の都心部、および南葛飾・南足立の両郡は対

象としなかった。前者は健康な女性は農村部に多いという前提なのだろうが、後者は下町地区への差別的な扱いといえる。[10]

東京府は、前回のように「希望者」を募るのではなく、該当する者をなるべく多く報告するように求めた。西多摩郡氷川村のように私生児を含め、村で誕生したすべての新生児を報告した町村もあった。これでは東京府レベルでの事務量が膨大になってしまうため、府は六月二〇日付で「全部ノ報告ヲ見合セ」て、五人以内とするよう方針変更を伝えた。これを受け北多摩郡清瀬村は「出産者ハ十八名ニ有之候得共、母ノ年齢超過セルモノ五名、母子共ニ健康ナラサルモノ三名、大工職二名、日給生活者二名、其他小作農業者六名」のため、推薦者なしと報告した。大工・日給生活者・小作農業者は、「身分及職業ノ賤シカラサル」の要件に引っ掛かるということだろうか。

東京府内で対象となった一一八町村のうち、候補をあげてきた町村は四八。総人数はおよそ三五〇人になったが、府が書類で不適格と判断した者を除いて調査対象としたのは四一人であった。それらを対象に警視庁の調査を入れ、実家が府外にあれば、当該道府県に調査を依頼した。こうして東京府は宮内省に五人を推薦した。夫の職業は会社員二人、教諭、農業、神職が各一人と依然として多様性は保たれている。本人の学歴をみても、高等女学校以上が三人で、高等小学校までが二人である。

この年は、栃木県の文書もそろっており、比較のためその選考をみてみる。[11] 栃木では、市町村ではなく各警察署が選考主体となっていた。県が県内一六の警察署長に候補をあげるように指示したのは六月七日。しかし、該当者なしの回答が相次いだため、県は産婆組織へのテコ入れを図った。宇都宮・栃木・佐野・足利に四つ存在した産婆組合に呼び掛け、会合を開催するように求めた。その場を利用して、候補者探しの依頼を目論んだのである。[12] その結果、五つの地域で産婆の会合が開かれ、そこから出た候補を三人に絞り、衛生官による健康診断を受けさせた。七月末までに宮内省に推薦する最終候補ひとりを決めた。夫とともに文具裁縫用品販売店を営む上都賀郡鹿沼町の女性である。[13]

結局、この年は、八府県からの計一四人が宮内省の選考対象となった。結果として、東京府豊多摩郡中野町の木内喜代

子（二二歳）、山梨県東八代郡石和町の八田義子（二一歳）が乳人に選ばれた（八月一九日発表）。木内は、福岡県立小倉高女卒業で、父は少将で退役した元陸軍軍人。夫は東京商大を卒業し、丸ビルの木材輸入会社に勤務する会社員であった。八田は長野県諏訪郡上諏訪町出身で、諏訪高女卒業。父は洋酒卸業。夫は峡東銀行常務取締役であった。

しかし、二人が官舎に入ったところで問題が起きる。九月八日、八田の夫の近親者が傷害で有罪判決を受けていたことが内務省警保局からの連絡で発覚。翌日、夫が上京し、「家事上、不得已事情を生じたり」との名目で辞表が提出された（「河井弥八日記」九月八、九日条）[14]。八田の調査は山梨県警察部の担当であるが、犯行が起こった場所が東京であったため、把握できなかったようだ。八田に代わって補充員から乳人に「昇格」したのは、神奈川県高座郡藤沢町の桜井ムメ（二六歳）であった。桜井は同町町会議員の長女として生まれ、夫は神奈川県水産課技手であった[15]。なお、祐子は生後六カ月で亡くなり、木内と桜井は直後に乳人を免ぜられている。

この年の選考では、結果として、木内・八田・桜井のいずれもが勤め人の妻（主婦）であった。前回のように農業を営む女性はこの後、みられなくなる。選考について、河井は「侍医の意見と人物試験とが大体に於て一致する」と述べている[16]。母乳の出具合や健康を主に判断する侍医と、人柄と家柄を主にみる事務方の意見が一致するというのだ。だが、前回と比べると、乳人の「家柄」が重視されるようになった。

第三節　二九年選考（和子誕生時）1

裕仁・良子の第三子、和子（孝宮）の誕生は一九二九年九月三〇日である。この年は採用要件に変更があった[17]。近親者に「不品行等ニシテ世ノ指弾ヲ受クル者アラサルコト」という記述が付けくわわったのである。明らかに前回の八田の事件を受けての要件追加であった。東京府が、管内区町村長宛ての依頼を出したのは七月三日。この年、候補者が女学校出身だったばあい、学業成績や素行、思想を問い合わせる調査を始めている。東京府は明らかに、学歴を重視し始めた。

こうした方針により、東京府の乳人候補の出身階層に変化が現れる。一九二七年選考で東京府が調査対象とした四一人と、二九年選考の七二人を比べてみる。高等女学校（実科女学校を含む）に通っていた候補者の比率を「高等女学校比率」[18]、夫が俸給生活者と専門職などの者の割合を「新中間層比率」[19]、農家の女性が多い三多摩地区の割合を「多摩地区比率」[20]として計算した（表4）。「高等女学校比率」は二二パーセントから四九パーセントと二倍以上になり、「新中間層比率」は、三九パーセントから六四パーセントと一・六倍も増加する。いっぽうで「多摩地区比率」は一〇パーセントまで大幅に減る。二九年選考では、東京市内の一五区を選考対象に入れ、多摩地区に多い農家の女性は候補となりにくくなる。都市の新中間層の妻、つまりは主婦であることが重要になってくるのだ。

表4　27年選考と29年選考の階層比較（東京府）

	1927年	1929年
高等女学校比率	22%	49%
新中間層比率	39%	64%
多摩地区比率	37%	10%

結局、東京府が選んだ候補は五人で、全員が高等女学校を卒業している。夫の勤務先は慶応義塾大学、三井物産、南洋興発、海軍、内務省で、全員が主婦であった。中等教育を受け、都市において中流以上の生活を送ることが重視されるようになる。

全体の傾向も同じである。八府県からの候補は計一三人であり、選ばれたのは、東京府推薦の奥野智恵子（二三歳、中野町）、神奈川県推薦の竹村玉恵（二五歳、鎌倉郡鎌倉町）であった（九月二一日発表）。奥野は、兵庫県出身。実家は酒造業、材木商、肥料販売業などを務める町の名家であった。奥野自身は、兵庫県立第一神戸高女を卒業し、慶応義塾大学予科講師、信太郎と結婚した。信太郎は中国文学者で戦後エッセイストとして著名となる文化人である。夫婦は与謝野晶子と知り合いで、子供たちは与謝野が命名している。竹村は高知県出身。神戸市立女子技芸学校を出て、建設会社で技師を務める男性と結婚した。奥野とともに新中間層の女性といえる。

「身分・職業を問わず」は、平準化された社会のなかで、要件さえあえば誰でも選ばれる可能性があることをうたった原則だった。しかし、そうした要件のもとでの選考は逆説的に人物が厳しく問われるようになる。実際、各府県や宮内省

は、誰もが納得するような候補を選ぶという課題を課せられるようになっていく。身分・職業の如何を問わないという看板は最後まで下ろされなかったが、その内実は形骸化していくのである。

① 以下、この段落は「皇孫殿下御誕生奉祝関係書類」冊の1（大正一四年）東京都公文書館（請求番号306. E4. 13）を利用した。

② 以下、この段落は「昭宮御誕生録」3（大正一四年）宮内公文書館（識別番号30003）を利用した。

③ 『都新聞』一九二五年一一月一三日。

④ 辰巳栄一は、敗戦後、吉田茂の「軍事顧問」であったとされる。湯浅博『吉田茂の軍事顧問辰巳栄一』、産経新聞出版、二〇一一年。

⑤ 『時事新報』一九二五年一一月二五日。

⑥ 『東京日日新聞』神奈川版一九二五年一一月二五日。ほかにも、たとえば、雑誌記事が穂屑や埃にまみれて農業に勤しんでいる家族の姿が美しいなどと書いている。「光栄の二婦人を訪ふの記」、『主婦之友』一〇巻一号、一九二六年、二八六―八頁。

⑦ 『国民新聞』一九二五年一一月三日。

⑧ なお、宮内省は飯島を乳人に任命後、京都府愛宕郡大原村の二人の女性を、「乳人候補者」に指名している。従前の乳人選び同様に宮中の人脈を使った指名である。前掲「照宮御誕生録」3。

⑨ 以下の四段落は「皇后陛下御慶事乳人選定の件」冊の3～6（昭和二年）東京都公文書館（請求番号307. F1. 17～20）を利用した。

⑩ 宮城以東の下町地区は、一九三一、三三年選考でも対象から外れている。また、島嶼部は一貫して対象外であった。

⑪ 以下、この段落は「乳人関係」（昭和二年）栃木県立文書館（簿冊番号1449）を利用した。

⑫ 職能としての産婆と、天皇家の出産との関係については以下の論文が参考になる。木村尚子「天皇を「生ましました」産婆――産婆・岩崎直子にみる天皇家と産婆職」、『ジェンダー史学』八巻、二〇一二年、二一―三五頁。

⑬ 『下野新聞』一九二七年八月四日夕刊。

⑭ 河井弥八『昭和初期の天皇と宮中』一巻、岩波書店、一九九三年、二〇二頁。「乳人同補充員命免調」（「皇后陛下御慶事関係書類」冊の5の1（昭和一〇年）東京都公文書館、請求番号318. E1. 02）。『報知新聞』一九二七年九月一一日夕刊。

⑮ 『東京日日新聞』一九二七年九月一一日夕刊には、桜井の出身校として「明治女学校」とあるが、「明治小学校」（正式には、藤沢町立明治尋常高等小学校）の誤りである。

⑯ 前掲『昭和初期の天皇と宮中』一巻、一八六頁。

⑰ 以下の三段落は「皇后陛下御慶事御乳人選定書類」冊の28～31（昭和四年）東京都公文書館（請求番号312. C1. 05～08）を利用した。

⑱ 調書に「女学校」とあるだけで高等女学校かどうか判然としないものは除いてある。実業補習学校や職業学校、技芸学校なども除いた。ただ当時の高等女学校では、結婚準備のため途中退学する者が少なくなかったので中退は出身者に含めた。

⑲ 会社員・官僚・教員・軍人などの妻、および医師・設計士など専門職の妻を入れた。ここから除かれるのは、農業者のほか、店舗を経営する自営業者などである。ライフスタイルが公私の区別が判然としている近代的な職業かどうかを判断基準とした。

⑳ 北多摩郡・南多摩郡・西多摩郡の女性を含めた。三多摩には含まれない豊多摩郡の女性は除いてある。

第三章　トラブルの続発

前章では、地元から乳人候補への疑問が生じたり、親族の犯罪から乳人が辞任するトラブルをみた。ところが、問題はその後も頻出し、政治問題化するなど複雑な様相をみせていく。

第一節　二九年選考（和子誕生時）2

一九二九（昭和四）年選考で、奥野・竹村が選ばれたことは前章で述べた。ここで問題が発覚する。発表直後、奥野について宮内省などに批判の投書が届くのである。[1] 河井弥八の日記には「御乳人奥野夫人に対する非難の手紙、大阪無名者より宮内大臣、内大臣、枢密院議長〔倉富勇三郎〕宛にて到着す。直に右写を作り、高橋兵庫県知事へ精細なる調査を依頼せしむ」（九月二四日条）とある。[2] 東京都公文書館の文書によると、非難は兵庫県の実家についてであることが分かる。この家にかなり前に嫁いできた女性の生家が「癩病」の家系であるとか、尊属に「精神病」や不品行の者がいるなどの誹謗であった。実父は、政友会の選挙運動に関わっており、政治的に反目する者からの中傷という面もあった。東京府は兵庫県警察部とともに再調査を行い、批判の多くが風評にすぎないことを確認した。ただ、一部には事実と認めざるを得ないものもあった。河井は最後に精神医学の権威であった呉秀三に意見を求めた。これにより、尊属の精神疾患がもっとも心配されたことが分かる。ただ、結論は「知事とも相談し、大臣、次官の了解を得て奥野を採用することとす」であった（「河井弥八日記」九月三〇日条）。[3]

ところが、竹村についても問題が生じる。今度は『国民新聞』による暴露であった。問題は、高知県幡多郡宿毛町の町長であった祖父についてである。同紙によると、祖父は町長在職中の一九一五年、公金横領と公印偽造の疑いがかかり、追い込まれて自死した。政友会系の政治家に選挙費を援助するために負債があったと同紙は説明している。記事の見出し

は「一点の濁りを許さぬ家系に公金費消自殺の祖父」であった。④

つづいて一〇月二九日には『国民新聞』『都新聞』が乳人補充員についても非難記事を掲載した。茨城県推薦のこの女性は、近世後期に金肥で財をなした稲敷郡龍ケ崎町の名望家当主の長女であった。当主は、地元銀行の設立発起人であり、町会議員を務めるなど地域の成功者である。記事は、町の産婆組合長が独断で女性を推薦したこと、および彼女の血統を問題視していた。血統の問題とは、女性の高祖母が「癩病」ではないかという疑いであった。これまでの例でも分かるように「癩病が出た家系だ」という非難は、ありがちな風評であった。「癩病」に対する根強い偏見に地域の有力者への妬みと政争が絡み、乳人を告発する動きにつながっている。これに対して、批判された家は『国民新聞』を相手取り訴訟を提起する意向を示し誹謗と戦うかまえであった。⑤

一連の動きのなかで、野に下っていた政友会は、一一月一日、有志代議士会を開き、調査委員を設けることに決した。政友会に厳しい発言をする侍従長・鈴木貫太郎への当てつけという意味もあっただろう。⑥いっぽう宮内省は「家の血統」より本人の体質を本位としたという「建前」を強調し、決定は覆さない方針をとった。⑦政友会にも乳人を政争の道具とすることへの躊躇があり、これ以上の糾弾はしなかった。

一九二九年は、裕仁が満州某重大事件の処理をめぐり、田中義一首相を叱責し、辞職に追い込んだ年である。デモクラシーへの社会動向と歩を合わせ、進歩的な皇室像を演出してきた宮内省幹部に対し、風当たりが強くなっていく。

第二節　三一年選考（厚子誕生時）

裕仁・良子の第四子（厚子、順宮）の誕生は一九三一年三月七日である。この年の選考から、内務省の管理のもと警察がさらに厳格な調査を行うようになった。皇后宮大夫・河井は前年一一月七日、内務次官潮恵之輔と会い、乳人選考の方法について協議し、同一七日に書状をもって「周到なる協力」を求めた。⑧これを受け内務省は選考対象となった府県以外

の府県に対し、調査依頼があったばあい、「慎重ニ御精査ノ上遺憾ナキヲ期」すよう指示した（一一月二四日付）[9]。兵庫、高知など対象府県以外の調査に問題があったことを受け、内務省が主導し調査の厳格化が図られたのだ。

この年は、埼玉県の選考状況をみてみる[10]。埼玉県では、警察と市町村の双方に同時に依頼を出し、出先で協力しながらもそれぞれが別々に候補者を報告する方式をとっていた。一九三〇年一一月二一日に県からの依頼がなされたが、締切までにあがった候補は北足立郡芝村の農業の女性のひとりだけであった。浦和警察署芝村駐在所の巡査からの報告である。県は一二月二七日、各警察署に対し、管内の産婆の業務簿を精査して、再度探すように指示。三人の新たな候補があがったが、いずれも農村部の女性であった。同じころ、これとは別に入間郡所沢町から、陸軍飛行中尉を夫にもつ女性が報告され、県はこれに飛びついた。父親が師範学校教諭と家庭が堅く、高女卒であったためである。岐阜県の出身だが、夫の赴任とともに所沢に転居していた。

この年の選考では、前回の失敗もあり、遺伝的関係について、伯叔父母、祖父母の兄弟、曽祖父母まで精査することを宮内省は求めた。所沢の女性の親族には軍人が多く、親族は広島・長崎・栃木・福岡・大分、さらには朝鮮半島の慶尚南道に散らばり、県はそれぞれの地方長官に調査を依頼した。問題となったのは、長崎県在住の兄が、鍼灸師からカリエスと告げられていることであった。結核性であったばあい採用要件に引っ掛かる。候補者の女性は辞退すべきかどうか県に相談し、宮内省は「一族ノ全部カ完全ナルモノハ容易ニナ」い旨を述べて、辞退は求めなかった。こののち、この兄は長崎の大学病院で診断を受け、カリエスでないことが証明された。この女性は、宮内省の健康診断まで進んだが、最終的には乳人に選ばれなかった。

この年は、八府県から計一一人の推薦があった。選ばれたのは、ともに東京府が推薦した森岡節子（二八歳、中野町）と北野貞（三〇歳、千駄ヶ谷町）である（一九三一年二月二五日発表）。ともに軍人の妻である。森岡は、亡くなった父も陸軍大佐であった。北野は滋賀県出身で、夫は敗戦時、中将（陸軍士官学校長）の北野憲造である。所沢町の女性を含め、軍人妻

が候補になることが目立ってきた。乳人は、家庭生活を犠牲にする仕事で、夫が軍務に就いていれば、奉仕を拒否されることも不平不満も少なく、親族に「不穏ナル思想」をもつ者がいる可能性は減ずるだろう。

しかし、そうであったとしても問題が起きた。北野の滋賀県の実家を批判する投書がきてしまう。[11] 親族にかつて罪を犯した者がいることを追及する内容であった。調べると、賭博に関わった者と度量衡法に違反した者がおり、調査では見落とされていた。最終的に「常習的ノモノニ非ス」などの理由で不問とされたが、公表して乳人を更迭すれば、調査の不備を認めることとなり、当局の保身という意味もあっただろう。

この年に関して注目されるのは、東京府の二人が選ばれたことである。補充員も東京と神奈川の二人であった。都市部重視の方針は皇后宮大夫・河井の意向があったと考えられる。都市新中間層が政治と直接的なつながりをもたないことが好まれたようだ。

第三節　三三年選考（明仁誕生時）

一九三三年一二月二三日の皇太子明仁（継宮）誕生時、乳人候補として府県から推薦されたのは計一一人だった。皇后宮大夫は前年、河井から広幡忠隆に交代している。乳人に選ばれたのは、埼玉県北葛飾郡幸手町の野口善子（二一歳）、茨城県久慈郡太田町の進藤はな（二三歳）である（一二月一一日発表）。[12] 野口は、久喜高女、山脇高女専攻科を卒業し、呉服商に嫁いだ女性である。進藤は兵庫県の出身で、高等小学校、女子技芸塾に通ったのちに結婚。夫が茨城県教員となったため太田町に住むようになった。

二人は、明仁誕生後、順調に勤務していたが、またもや問題が起きる。それも、宮内大臣の辞意表明にいたる、これまでで最大の問題となる。進藤について出身地（兵庫県）の軍医が、血統に「忌むべき遺伝症」があるといいだし、現地師団の副官が上京して陸軍大臣に事情を具申するという行動に出たのである。内大臣の牧野伸顕は「本件に付ては此迄も繰

返へされたる事なるが、地方的感情、嫉妬等の動機に起因したる疑あり、目下極力調査中」と記す（「牧野伸顕日記」一九三四年二月一三日条）[13]。冷静に対応する姿勢がみられるが、事態は三月に入り急変する。皇后宮大夫の広幡と「黒金」事務官[14]が、宮内大臣湯浅倉平に進退伺を提出、湯浅自身も辞意を表明する（同、三月一二日条）[15]。牧野は三月一三日、天皇裕仁に拝謁し、「乳人の人選に就ては、之が直接に選定に当るのは地方官でありまするのみならず、乳人本人が果して狂人と云ふのでもありません」（「木戸幸一日記」同日条）と述べ、湯浅の辞任に反対した[16]。

裕仁も「乳には遺伝の伴ふものに非ず、殊に根本の血統云々の事も的確の事実も不明の事なれば、道理を以て押し通ほすべきものと思考、種々周囲の事情の為め下げるを適当とする評議なれば止むを得ざるべし、然り乍ら問題に付ては責任を云々するは当らず」（「牧野伸顕日記」三月一三日条）と宮内大臣に責任なきことについて牧野に同意した[17]。裕仁は、遺伝病があったとしても授乳を通じて影響しないし、事実も不明なので、筋を通して乳人を使用しつづけてよいと考えたのである。裕仁はしかし、事情に鑑み、当該乳人を「下げる」という判断がくだされるならやむを得ないとも述べている。「乳人同補充員命免調」には、進藤が一九三四年三月以降に「転地」したと記されている[18]。免ぜられたわけではないが、事実上の更迭である。

このあとの乳人補充は異例の経過をたどる。この年には補充員が二人おり（東京と埼玉）、通常ならばどちらかが「昇格」するはずであった。東京都公文書館の文書をみると、一九三四年三月、補充員に対し、追加調査が実施されている[19]。しかし、二人の補充員に新たな問題がみつかり、どちらも乳人にはならなかった。そして、宮内省は三月中旬ごろ、岐阜・静岡・愛知・滋賀・京都の五府県に対し、新たに乳人候補を推薦するように求めた（のち、東京・茨城に追加依頼）。明仁の乳人について第二回の選考である。その結果、計六人の候補が集まった。健康診断などを経て、岐阜県推薦の二人が新たに乳人補充員に任命された（五月一日決定）。

このうち、揖斐郡八幡村の竹中敏子（二〇歳）が五月八日から実質的に乳人と同じ勤務を始める。竹中は退任一カ月前

の一一月一二日に乳人に正式に「昇格」し、そのとき初めて新聞に名前が発表された。だが竹中が乳人となるまでの複雑な事情は公表されることはなかった。厳密な身元調査と健康診断を経て採用された乳人が不具合となり、補充員による補塡もできないのは由々しき事態に違いない。そうした事情は隠されたのである。

この年、軍部による「君側の奸」攻撃の材料として乳人選びが標的になった。これを封じる手段はより徹底した調査以外になく、以後の選考では実際にさらなる厳格な調査が行われるようになる。

① 以下、この段落は、前掲「皇后陛下御慶事御乳人選定書類」冊の28（昭和四年）を利用した。

② 河井弥八『昭和初期の天皇と宮中』三巻、岩波書店、一九九三年、一六五頁。「倉富勇三郎日記」（国立国会図書館憲政資料室）一九二九年九月二四日条も、投書が届いたことを記している。

③ 前掲『昭和初期の天皇と宮中』三巻、一六九頁。

④ 『国民新聞』一九二九年一〇月一八日。

⑤ 前掲『昭和初期の天皇と宮中』三巻、一九二頁。

⑥ 鈴木は当時の官吏減俸問題で、政友会に皮肉を込めた発言をしていた（『大阪朝日新聞』一九二九年一〇月二四日夕刊）。しかし、発言の責任を直接問いがたいので、「乳人問題」で宮内省の責任を問おうとしているとの見方もあった。前掲『昭和初期の天皇と宮中』三巻、一九一―二頁。

⑦ 『国民新聞』『時事新報』一九二九年一一月二日。

⑧ 前掲『昭和初期の天皇と宮中』四巻、一八三、一九一頁。

⑨ 「乳人候補者選定に関する件」国立公文書館（請求番号平9警察00272100）。

⑩ 以下の二段落は「皇子殿下ノ乳人候補者森岡節子北野貞子推薦ノ件」（昭和六年）埼玉県立文書館（文書番号昭2426-1）および、前掲「乳人候補者選定に関する件」を利用した。

⑪ 以下、この段落は、「順宮厚子内親王殿下乳人調書」（昭和六年）東京都公文書館（請求番号327. E6. 29）を利用した。

⑫ 「皇太子殿下御誕生乳人関係書類」冊の10（昭和八年）東京都公文書館（請求番号316. C1. 02）。

⑬ 伊藤隆・広瀬順晧編『牧野伸顕日記』、中央公論社、一九九〇年、五六二頁。

⑭ 皇后宮職には「黒金」事務官はおらず、大金益次郎・皇后宮職庶務課長のことだと思われる。皇后宮職内廷課長が黒田長敬なので混同したのだろうか。

⑮ 前掲『牧野伸顕日記』五六八頁。

⑯ 木戸日記研究会校訂『木戸幸一日記』上巻、東京大学出版会、一九六六年、三一三頁。

⑰ 前掲『牧野伸顕日記』五六九頁。裕仁の言葉を、牧野の秘書官、木戸幸一はつぎのように記録している。「学術的に見て何等根拠なきは自分も多年生物学を研究して居るが、斯如きことにて進退問題を惹起すが如きは面白からず」（前掲『木戸幸一日記』上巻、三一四頁）。

⑱ 前掲「乳人同補充員命免調」。

⑲ 以下、この段落は、前掲「皇太子殿下御誕生乳人関係書類」冊10

（昭和八年）を利用した。

第四章　乳人の変容とその後

前章では、乳人をめぐり問題が相次ぐさまをみてきた。その結果、軍人・公務員を中心とする俸給労働者の妻が乳人になる例が多くなったことを指摘した。この章では、選考のさらなる厳格化、婦徳の顕彰という乳人の変容、そしてその後の乳人について考えていく。

第一節　三五年選考（正仁誕生時）と三九年選考（貴子誕生時）

前々章、前章で一九三三年選考まで検討したので、正仁（義宮）誕生（一一月二八日）に伴う三五年選考、貴子（清宮）誕生（三月二日）に伴う三九年選考の二回について、とくに選考の厳格化についてみていきたい。

すでに一九三三年選考では、候補者の系図を添付することが推奨されていたが、三五年選考では系図の記入例が「雛形」として提示され、思想関係・遺伝的疾病を書き込むよう指示された。[1] 甘くなりがちである祖父母の兄弟、曽祖父母の調査を徹底する意図からである。

一九三五年、東京府は区市町村からあがった一六人を調査対象とした。これまでに比べると対象人数が大幅に減っている。調査の厳格化に伴い、ひとり当たりにかける調査の労力が増したため、調査に値する人物だけを推薦するよう求めたためと考えられる。中野区からはこの時期としては珍しく農業の女性があがってきた。東京府の報告は「本人ハ農家ニ生育シ農家ニ嫁ギ〔略〕一見素朴ナル農婦ニシテ、過去及現在ノ境遇並素養等ヨリ推断スルニ乳人トシテ御奉公ヲナシ得ルヤ疑問」と評価した。農家で育ったことや、小学校卒業後、裁縫学校にしか行っていないことが、適格性に欠けると判断されたのである。[2] また、向島区からあがってきた白米商の女性について、東京府の調査は「東京市トシテハ低湿地タル向

島ニ居住スルモ堅実ナル中商（白米）ノ家庭ニアリ」と評価した。[3] 下町に住むことが評価を下げているのである。

つづいて神奈川県の選考をみる。[4] 同県は八月二六日、各警察署長宛てに乳人候補を報告するように求めた。その結果、浦賀・伊勢佐木・葉山・鶴見の四警察署から計五人が推薦された。県が選んだ候補は、三浦郡浦賀町の前田聡子（二七歳）である。和歌山高女を卒業した女性で、実父（故人）は裁判所書記を務めた官吏であった。兄が海軍勤務になった関係から、一家で浦賀に移住し、兄の友人の海軍軍人と結婚し三人の子供をもうけていた。この過程で、前田は、夫の親族を含め一族郎党が徹底的に調査された。県レベルの調査には一カ月が費やされ、これまでより厳密さは格段に増した。神奈川県警察部の調査依頼は、和歌山・大阪・京都・兵庫・東京・滋賀・三重におよんだ。宮内省の指示で重要なことは、祖父母の兄弟、曽祖父母を含めた遺伝的疾病の調査であった。だが、祖父母の兄弟ともなると、居所の把握も困難であった。たとえば、前田の祖母の弟は神戸で亡くなったことが調査のなかでようやく判明し、兵庫県に調査を依頼、死因が癌であることを把握する。

前田についてもっとも問題になったのは、この一二年前に若くして肺結核の疑いで亡くなった本人の姉であった。当時の担当医師は記憶しておらず、近所の聞き込みや「火葬認許証」の調査まで行われたが、はっきりしたことは分からなかった。神奈川県は、完全な候補ではないが比較的要件に近い「参考候補者」として前田を推薦した。

他府県の調査をみても、徹底的に調べる姿勢は共通している。亡くなった者は埋葬された寺院、戒名まで調べられた。添付された系図に一〇〇人を超す親族が掲載される例も少なくない。[5]

こうした厳選の結果、各府県から推薦されたのは計一四人であり、長野県北安曇郡大町の福島治（二二歳）、群馬県高崎市の狩野のぶ（三〇歳）が選ばれた（一一月二六日発表）。福島は長野県出身であるが農林省技手と結婚し、東京府に在住する女性である。里帰りで出産したところを地元から推薦された。狩野も、もともとは千葉県出身で、陸軍少佐の夫が高崎連隊区司令部勤務のため群馬県から推薦された。神奈川県推薦の前田は、補充員四人のひとりとなった。ただ、正仁誕生

の二カ月後、狩野が「故障」し、前田が乳人に「昇格」した（一九三六年一月）。この年も、福島・狩野・前田のいずれもが官僚の妻である。

最後の一九三九年選考は各府県文書が残っていない。前述したとおり二五府県が対象となる最大の調査となった。各府県から宮内省に推薦された候補は計一九人で、選ばれたのは福島県耶麻郡喜多方町の矢部経子（二五歳）と新潟県三島郡関原町の松本夫佐（二五歳）であった（二月二日発表）。矢部の婚家は喜多方の大きな呉服商で、実家も福島市の旧家である。松本の夫は地域の開業医。夫の父母もともに医師で、地域医療に貢献した町の有力者であった。矢部と松本は、地域の名望家層からの選出といえる。

地方に乳人がシフトするのは、責任者が広幡に交代したことに伴う結果であろう。皇后宮大夫の交代以降、東京からは乳人が選ばれなくなり、西日本に対象が広がっていく。緊急のばあいを考慮して最低ひとりは東京から選ばれていたことからの変化である。[6] 広幡は地方に選考を広げる方針をとった。そうすると、地域の有力者の一族が選ばれやすくなる。たとえば、一九三三年選考で選ばれた竹中敏子の生家は江戸時代に村の総名主を務めた旧家で、養父は岐阜県会議員であった。

第二節　乳人の顕彰

そのようななかで、皇族への授乳自体よりも、婦徳の顕彰が重視されるようになっていく。子供が健康優良児であること、本人は病気を知らない身体の持ち主であることなどが新聞に報じられる。乳人の誕生が「地域の誉れ」として扱われるようになっていく。

一九三九年選考で乳人となった松本夫佐は、五歳のとき麻疹で発熱して以降、病気らしい病気にかからないこと、高女時代は無欠席であったこと、体格がよいこと、運動が得意なことが強調された。松本は三五年に結婚し、医師である夫を

支えながら二人の子供を育てていた。その松本を『新潟毎日新聞』は「興亜日本の第二国民を育て上げるべき典型的理想の母性」と称えた[7]。さらに『新潟新聞』は「夫に従順にして思想的動向更になく、専ら家事に務め、極めて真面目にして素行善良として他の模範に足る女性」と良妻ぶりに焦点を当てた[8]。

松本は一九三九年二月五日に上京する。出発の二日前、地元小学校で町長らが出席する壮行会が開かれ、出発の模様はニュース映画の映像となった[9]。一年後、奉仕を終えたときの出迎えはさらに盛大で、越後関原駅には地元小学校児童、婦人団体会員ら多数が出迎え、町は「凱旋勇士を迎へるやうな喜び」に包まれたという。町長を先頭に自動車で隊列をなして、村の鎮守に帰郷奉告をなした[10]。初期の乳人は東京やその近郊出身だったこともあり、出発と帰還が大々的に祝われることは少なかったが、地方では大規模な送迎が一般的となった。

記念碑が建造された乳人もいる。一九三三年選考（第二回）の竹中敏子である。竹中の地元、岐阜県八幡村（現池田町）の八幡小学校には「皇太子殿下御乳人奉仕記念」の石碑が立つ。八幡村婦人会が、「会員中ヨリ一家四代ニ渡ル斯ノ如キ名誉アル奉仕者ヲ出セルハ本会無上の栄誉」として三五年五月に建立した[11]。村社である八幡神社にも植樹を記念した石碑が残る。後期の乳人は「郷土の誉れ」として地域で顕彰される対象となっていく。

乳人の変容の背景には、一九三〇年代以降、国家がより積極的に「母」という役割を通じて国民統合を目指したことと関係があるだろう。古久保さくらは、三一年結成の大日本連合婦人会の運動を通じ、全国的な規模で「母」役割の重要性が強調されたことを指摘する。その背景として、古久保は「家制度」の三つの危機、すなわち、（一）一家離散や娘の身売りにみられる経済状況に起因する家の形態的解体、（二）マルクス主義の全盛に伴う青年層の「思想悪化」による家権威の軽視、（三）恋愛希求の高まりによる結婚システムとしての家の弱体化――をあげている[12]。

乳人の変容に伴い、地域社会の過剰な反応も目立つようになる。一九三五年選考の狩野のぶは、適当な世話婦がいなかったため、群馬県は高崎市内で一、二の名家である醸造業の飯島家の長女（一八歳）を世話婦とした。世話婦の身元は問

われていないので、過剰な対応にもみえるが、世話婦までが「光栄」な職務となったのである。[13]

一九三三年選考の進藤はなの茨城県太田町の自宅周辺では、乳人奉仕開始の一週間前に赤痢が集団発生した。茨城県では、自宅の「徹底的消毒」をなすとともに、検便その他の検査を行い、異常がないことを確認した。さらに「一刻も早く危険区域を脱する」ために、水戸市に家屋を用意し、家族すべてを移動させた。[14] 感染の危険がないと結論付けられたのに、「万が一」のために転居したのである。

乳人はもともと天皇家の子供に授乳できる女性を探すものであり、その目的からは東京近郊で探したほうが都合がよかったはずである。ところが、後期の乳人は、母性の顕彰を通じた国民統合という別の目的を併せもつようになり対象が地理的に広がっていく。

第三節　その後の乳人

新潟県の松本夫佐が、地元に帰還したとき、つぎのようなコメントを発した。「〔清宮〕殿下には益々御健かに見事な御発育振りで誠に有難い御事と存じあげてをります、その他宮中の御模様は恐懼の至りで御座いますので申し上げることは差控へ度いと思ひます」。[15] これは内務省が事前に指示したとおりの談話である。[16] 乳人は宮中の体験を語ることが禁じられていた。

そのなかで異質であったのは、一九二九年選考の奥野智恵子である。夫が大学講師という文化人であり、本人も乳人奉仕中、紫式部日記を読む教養人であった。[17] 奥野は三六年、膵臓の病気のため三〇歳で亡くなってしまうが、奉仕中つけていた日記の一部は六三年になり、長男によって公開される（光文社の女性月刊誌『二人自身』）。全体の半分が雑誌の二〇頁にわたり掲載され、奉仕中の心の動きが分かる。奥野は長女（三歳）と、生まれたばかりの長男（四カ月）を連れて二九年一〇月に宮中入りするが、長男は気管支カタルで咳が止まらないうえ、一カ月後長女が水痘にかかり、中野の家に帰され

てしまう。部屋は消毒され、半月ほど授乳奉仕ができなかった。このときの気持ちを以下のようにつづっている。

ほんとうに〳〵続きさまに病人ができ、何といふ神の御いかり（怒）かと思ひ、又又かくり（隔離）の事を思ひ、ほんとうになさけなく、何故御じたい（辞退）申上げなかつたかしらと後悔いたしました。〔略〕然し日本の国民全体が私のこの度の大命を果すその日のみを、待つていて下さる事を思ふと、我まん（慢）するより他はない、君の為、宮様御成人遊ばされるその為にと思ひ、涙をのみました。[18]

後悔と忍耐のはざまで奉仕する複雑な心境が表現されている。奥野の夫信太郎は、妻が奉仕中、頻繁に外泊するようになり、奥野は芸妓遊びを疑う。信太郎の追悼集にある年譜には、「放埒を与謝野晶子にひどく叱責された」とある。[19]

実は奥野の日記はこれ以前に小説の題材になったことがある。丹羽文雄が『世界』（一九四九年）に書いた「乳人日記」である。[20] 元の日記が奥野の筆によることは隠されているが、奥野の長男から日記を借りた丹羽が、脚色を含め読み物に仕立てた。そこには、夫と離れ、わが子に十分な愛情を注げない苦しみ、制度の犠牲になった女性の悲劇が描かれている。ただ、奥野の日記自体には、乳人としての誇りや楽しさも日常の詳細とともにつづられている。丹羽の小説がきっかけになって、乳人制度は、天皇制絶対の時代に起きた「狂気」とばかりに結論付けられることもあった。[21]

すべての乳人が光栄に満ちていたわけではない。事実上、更迭された進藤はなは、婚家にも実家にも帰れず、半年以上、栃木県の塩原御用邸に滞在していた。[22] 同じように途中で奉仕ができなくなった狩野のぶも同御用邸に滞在していたことが確認できる。[23] 野口善子は帯同した娘が真っ赤な便をし、原因が分からず、自死まで考えたと話している。[24] いっぽうで乳人を務めあげた人たちは、戦後、地方行幸で裕仁に拝謁することを楽しみにする純朴さをもつ。一部の乳人は、戦後も奉仕の「光栄」をメディアに語りつづけている。授乳した皇族の誕生日に宮中に招かれ、旧奉仕者として遇された。

良子が最後の分娩を終えたとき、乳人は役割を終えたように思われる。一般社会においても、占領期までは乳母慣行は

残っていたものの、一九五〇年代になると人工栄養（粉ミルク）が広く普及し、乳母は過去の慣行となる。[25] 一九五九年九月、皇太子明仁の妃、美智子の懐妊が正式に発表されたおり、東宮大夫の鈴木菊男は、乳人は廃止し、美智子自身の母乳と人工栄養で養育する方針を明らかにした。[26] 明仁の乳人だった進藤はなは、皇孫（徳仁、浩宮）の誕生に際して、世の中が変化し、人工栄養も発達したのだから世間並みに自らの手で育児をするのは当然だと新聞の取材に答えている。[27]「封建的な乳人追放[28]」はもはや、明仁・美智子のカップルでなかったとしても時代の流れであったといえるだろう。

① 前掲「皇太子殿下御誕生乳人関係書類」冊の10（昭和八年）および前掲「皇后陛下御慶事関係書類」冊の5の1（昭和一〇年）。

② 前掲「皇后陛下御慶事関係書類」冊の5の1（昭和一〇年）三五五枚目（コマ番号396）。

③ 同右、一九三枚目（コマ番号214）。東京府は一九三五年選考では、下町や多摩地区を選考対象地域として復活させた。

④ 以下の二段落は「昭和一〇年雑秘書（乳人関係）」神奈川県立公文書館（請求記号 県各課1―2―73）を利用した。

⑤ ただし、人口流動性が高かった昭和戦前期において、「祖父母の兄弟」「曽祖父母」のすべての死因を調べるのは困難であり、遺伝的疾病の完全な把握ができたわけではない。

⑥ 『国民新聞』（一九二七年八月五日）によると、最低ひとりは東京から選出すると決まっていた。

⑦ 『新潟毎日新聞』一九三九年二月一三日。

⑧ 『新潟新聞』一九三九年二月三日。

⑨ 『東京日日新聞』新潟版一九三九年二月四日。当時のニュース映像は、松本の長男の妻、松本久美子氏（千葉県松戸市）所有のビデオテープをデジタル化した。

⑩ 『東京日日新聞』新潟版一九三九年一二月二六日。

⑪ 池田町立八幡小学校の校庭に立つ石碑「皇太子殿下御乳人奉仕記念」碑文。「一家四代」とあるのは、生まれたばかりの子供のほか、母、祖母も一緒に宮城内で暮らしたことを指している。

⑫ 古久保さくら「一九三〇年代における母役割の再編」、『人権問題研究』二号、二〇〇二年、五九頁。

⑬ 「御乳人の補助役 光栄の飯島淳子嬢」、『上毛及上毛人』二二五号、一九三六年、七〇―二頁。

⑭ 『いはらき』一九三三年一二月一八日。

⑮ 『北越新報』一九三九年一二月二六日。

⑯ 以下の文書は、神奈川の前田が免ぜられるときの指示書だが、帰郷の際、乳人が発すべき言葉として、松本の言葉とほぼ同じ談話例が示されている。「乳人及乳人補充員被免ノ件」前掲「昭和一〇年雑秘書（乳人関係）」。

⑰ 奥野が選ばれた背景には、夫信太郎が、橋本綱常の孫であったことがあると考えられる。

⑱ 奥野智恵子「内親王さまにお乳をふくませた三六五日」、『二人自身』三巻一〇号、一九六三年、一八八頁。記述は一九二九年一一月五日条。奥野の長女、根本檀氏（東京都武蔵野市）所有の日記原本によったため雑誌とは表記が異なる。

⑲ 村松暎編『奥野信太郎回想集』、慶應義塾三田文学ライブラリー、一九七一年、四一二頁。

⑳ 丹羽文雄「乳人日記」、『世界』四七号、一九四九年、七五―九六頁。

㉑ 有馬頼義が書いたフィクション「お乳人物語」の副題が「狂気か正気か」であった。有馬頼義「お乳人物語」、『文藝春秋』二九巻一〇号、一九五一年、五〇―六一頁。

㉒ 進藤の長男である進藤通顕氏（千葉県流山市）のもとに、進藤が、塩原郵便局で郵便小為替を現金にしたときの受領証書（一九三四年八月二〇日）が残されている。

㉓ 前掲「乳人及乳人補充員被免ノ件」。

㉔ 「回想あの孤独だった三六五夜」、『女性自身』一一巻一八号、一九六八年、一一六頁。

㉕ 敗戦直後の婦人雑誌には、糖分が多い粉ミルクよりも、乳母による授乳のほうが好ましい旨を記している（小林彰「乳児と栄養」、『婦人画報』四一巻三号、一九四六年、二〇頁）。ところが、五三年になると、ばあいによっては母乳よりも人工栄養が優れているとの記述も出てくる（半沢董子「人工栄養で日本一赤ちゃんに」、『主婦と生活』八巻八号、一九五三年、一七四頁）。五〇年代から六〇年代の粉ミルクの爆発的な生産量の増加については、以下の文献を参照。小林亜子「母と子をめぐる〈生の政治学〉――産婆から産科医へ、母乳から粉ミルクへ」、山下悦子編『女と男の時空――日本女性史再考』Ⅵ、藤原書店、一九九六年、六八―一五八頁。

㉖ 『毎日新聞』一九五九年九月一五日夕刊。

㉗ 『東京新聞』一九六〇年二月二四日。

㉘ 『産経新聞』一九五九年九月一五日夕刊。

おわりに

明仁・美智子による乳人廃止は、「平安時代から続いてきた歴史と伝統」の変革だと語られることがある。[1] しかし、裕仁・良子のもとでの近代乳人は、近世的慣行を大きく変革したものであり、「歴史と伝統」をそのまま受け継いだ制度ではない。新中間層という階層が本格的に登場し、〈近代家族〉としてのライフスタイルが一般化する大正後期に、国民と皇室を結ぶ新たな回路として構築された装置なのである。当初、「身分・職業不問」というスローガンが掲げられた。しかし、その理念は、回数を重ねるうちに変容し、最終的には軍人を中心とした公務員の妻、および地方の名望家層の女性に乳人は収斂していく。民衆の側からみると、乳人は「平準化」された国民を前提にして、その誰もが候補になれることを期待させる仕組みであった。しかし、その理想はいつの間にか反転し、乳人は地域社会のなかで皇室と関係する特別な

存在とみなされるようになる。人びとと皇室のフラットな関係という理念は、天皇神格化の時代のなかで形骸化していくのである。

その過程で、乳人は、あるべき女性像を提示する装置となっていく。健康であること、子供を立派に育てること、国家のために個人を犠牲にすることが女性国民として正しい行いであり、「精神病」、「癩病」、肺病などの病は社会から放逐すべき対象であることを乳人選考が示していくのである。家庭を犠牲にして国家に奉仕する「母」を顕彰し、「母」を通じた国民を統合する制度と化していく。とくに戦争が本格化してくると、乳人は地域のなかで女性を〈国民化〉するために欠かせない制度となるのである。

① 渡辺みどり『美智子さま マナーとお言葉の流儀』、こう書房、二〇一五年、一二〇頁。

（成城大学文芸学部教授）

The Process of Selecting *Menoto* in the Modern Imperial Family

by

MORI Yohei

The Japanese imperial family maintained a long-standing custom of employing *menoto*, or wet-nurses, who provided their breast milk to royal princes and princesses. The new Taishō-era royal couple, Crown Prince Hirohito and his wife Nagako, later to be the Emperor Shōwa and Empress Kōjun, seeking to modernize their family, tried to raise their children by themselves, contrary to imperial tradition. Obviously, employing wet-nurses stood in contradiction with the modernization of the imperial family. However, the new couple kept the wet-nurse custom. Furthermore, the scale of the pool from which wet-nurses was selected was enlarged year after year. This paper examines why and how the wet-nurse system was preserved in the late Taishō and pre-war Shōwa periods (1925-1939), while Hirohito and Nagako sought to modernize their family. It also focuses on the transition of relations between the royal family and the people of Japan.

The reason the *menoto* tradition was kept might simply have been the difficulty in abolishing the long-enduring system. However, it is more important to point out that, instead of abolishing the tradition, the couple and the imperial household officials introduced the new idea that they would use the *menoto* system as a medium to connect the royal family with the people. The Imperial Household Ministry sought wet-nurses in Tokyo and suburban prefectures, and later more broadly across eastern Japan, irrespective of the social rank and professions of the candidates' families. Wet-nurses were recruited through local governments, although in previous generations they had mainly been found through personal connections. On the assumption that the nation had been socially equalized, in principle, any healthy mother could be selected as a wet-nurse. The first child of Hirohito and Nagako, Princess Shigeko, was born in 1925. In that year, two women were selected as wet-nurses, one being Hirayama Shizuye. She attracted considerable attention since she was from a rural village in Kanagawa Prefecture. In a word, proximity to the people was valued in the initial phase of the generation of Hirohito and Nagako.

However, the process of selecting wet-nurses later encountered grave difficulties. For instance, in 1929, a woman who wet-nursed Princess Kazuko, Takemura Tamae, was criticized by newspapers because her grandfather, a town mayor in Kochi prefecture, had been charged with embezzling public money and had been driven to commit suicide. In 1934, it was discovered that Shindō Hana, a wet nurse of Crown Prince Akihito, had a relative with some kind of hereditary disease, and she was replaced. This issue led the minister of the royal household to consider resigning, although he ultimately kept his position. Such criticism arose out of regional political conflicts and feelings of jealousy toward the families of women chosen as *menoto*.

Consequently, as time passed, the standards for the selection of wet-nurses became ever more rigorous. For instance, even the causes of death and health conditions of a candidate's great-uncles and great-aunts had to be thoroughly examined, however difficult such an examination could be because of the remoteness in time. Candidates were scrutinized in particular to determine whether they had relatives with such diseases as pulmonary tuberculosis, leprosy, or mental disorders. As a result, two social classes became favored as suppliers of wet-nurses. One class consisted of housewives in middle-class families in urban areas, especially the housewives of government officials or military men. The other class was women from families prominent in local society.

The significance of the *menoto* system gradually changed, becoming something more than merely wet-nurses nourishing royal princes and princesses. It was transformed into a system to praise women who sacrificed themselves and their families, and who rendered good service to the nation and the royal family. When wet-nurses departed for the Imperial Palace, they received celebratory send-offs akin to those given to soldiers going to the battlefield. For Takenaka Toshiko, a wet-nurse from Gifu prefecture in 1934, a monument to honor her was set up by the local women's association in a local elementary school.

To conclude, when *menoto* were chosen in the generation of Hirohito and Nagako, there was initially an effort to strengthen horizontal ties between the royal family and local people; however, this ideal lost its substance in an era of war and the divinization of the emperor. Instead, the process of selecting wet-nurses became more important as a means of unifying the nation.

Key Words; wet-nurses, modernization of imperial family, modern family, mass

society